

田んぼの話

土地家屋調査士 松原正彦

6年程前から毎年、滋賀県の高島市（畑地区 15.4ha、359枚）で、棚田をお借りして、以前から興味のあった稲作の体験を始めました。（棚田とは千枚田とも言い、傾斜1/20（20mに付き1m上がる）以上の傾斜地に作られた階段状の水田です。）所謂、棚田オーナー制という制度です。私は友人にこの制度のことを教えて頂いて、家族一緒に稲作を体験しています。私の自宅からは、この棚田まで片道約100キロ程ありますが、今ではここの棚田の魅力にどっぷりと嵌ってしまい、車の運転も苦になりません。

この棚田オーナー制度は、減反や田畑を継いでいく後継者の不足等で、棚田の維持が難しくなって休耕地になってしまうのを防ぐ意味もあり、地元・高島市・京都精華大学喜田ゼミの協力で10年前から始めたそうです。この棚田は、農林水産省認定の「日本の棚田100選」に滋賀県で唯一選ばれている美しい、昔ながらの田舎の風景の中の田んぼです。おそらく100年や200年、いやもっと前からこの里山の景色は変わっていないと思います。週末ともなるとこの風景を求めて、写真家や絵画ツアーの方々が沢山来られます。少し前には、映画「俺たちの大和」のロケ地にもなりました。最近では日本の各地で、この米のオーナー制度を始めているところが増えてきました。去年は、大阪府の茨木市役所の方や他の市役所の方も視察に来られていたようです。里山や棚田を守る方法として発展してほしいものです。今年は、稲刈りの後にミーティングがあり、この地区の棚田の歴史などを紹介してもらいました。40年前に比べると、耕作面積は約半分、集落の人口も激減し高齢化

した。昔と現在の航空写真を比べると、休耕田に木が生え、山になってしまったこと。折角、開墾し耕作していた土地が利用できません。美しいこの棚田も何もしなければ、山に戻ってしまうでしょう。日本の農産業自体がこれからどうなるのか、本当に心配です。真剣に農業のことを政府や地域の行政、国民自体が検討する時期が、来たのではないのでしょうか。

稲作の手順は地元農家の方々に下準備をして頂き、5月に田んぼの畦塗りに始まり、田植え、6、7月に草（雑草）刈りや肥料まき、9月に稲刈りという具合です。5月の畦塗り作業の時などは、子供たちはイモリ（アカハライモリ＝日本イモリ）取りに必死。一日中、畦塗りはそこそこで捕獲に熱中しています。20匹ぐらい持って帰り、自宅の水槽で育てています。棚田の魅力は米だけでは無いようです。都会では無くなってしまった自然の魅力に子供たちは、網を片手にはしゃぎ廻っています。見ていて何か良い感じ。車に置いてあるテレビゲームなど誰もしません。やっぱり自然が一番。周りにはへびやカエル、沢ガニ、蝶々、イノシシ、鹿、猿までいます。今のところ熊は、まだ見ていません。大人は、まじめに稲作を体験、腰を屈めて、大汗かいて次の日には、筋肉痛といった具合です。最近では年季が入ってきたのか、子供たちも慣れてきまして、野良仕事も中々の手つきに成ってきました。稲作の引き込み水も大変冷たくて、清流といった感じで気持ち良いです。比叡山系の雪解け水の影響でしょう。地区の公民館でお昼ご飯を頂き、お世話をさせて頂いている方々とミーティングをしたりします。

一日の農作業が終わり昼食を頂いた後、近くの温泉に行って汗を流して帰ります。さて、収穫した米の味なんですが、自分で言うのも何ですが、穂のかな香りと甘みが適度にあり、本当においしいです。気に入ってしまい、自宅ではこの米オンリーとなりました。こんな調子なもので、今ではチームが段々と増えまして、友人5家族の大人数となり、農作業終了→近くの運動場で大人対子供の野球勝負まで、イベントが追加されました。その後、温泉→帰宅→みんなで焼き肉屋へGO！。

こんな案配で一日満喫、ストレス発散、子供達満足、家族円満という連立方程式が成立！。興味のある方は、当事務所に連絡下さい。一緒にやって楽しい連立方程式を成立させましょう。

数年やって感じるのですが、稲作作業の中で一番楽しい作業は何度やっても、稲刈りです。ザクザクと鎌で稲を刈り取る時の何とも言えない感覚は、一体何なのでしょう。これでご飯が食べられると思うことでしょうか。いやこれは先祖から脈々と受け継がれてきた農耕民族のDNAが刺激されて、テンションが上がるからなのか……。いずれにしても、この感覚はやってみて初めて判ります。

そうそう、最初に申しました、京都精華大学喜田ゼミのことですが、平成18年5月の田植えの時のことです。精華大学の教授は嘉田由紀子氏でした。

嘉田先生…「今度の滋賀県知事選挙に立候補するんです。また、宜しくお願いします。」

それを聞いた僕は…「うわ…先生そりゃ無茶ちゃいますか。滋賀県言うたら、ガチガチの保守ちゃいますの？組織力がポイントやでえ。」

嘉田先生…「今回は別に当選しなくてもいいんです～。」

それを聞いた僕は…「ああ、そうですか……う～ん……」

とまあ、こんな感じでした。

まさか、本当に当選するとは思っていませんでした。でも、考えてみると嘉田さんは、滋賀県の過疎や減反に悩む棚田のことや、琵琶湖のことなどを本当に地道に色々やってこられた方だから、新人候補で

あっても票が入り当選したんだと思います。ここの棚田には、こんな人もいます。

